

# 「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究 報告書」 の概要について

## 1. 調査研究の目的・概要

### (1) 調査研究の目的

現在、日本では5歳児の95%が幼稚園、保育所、認定こども園に通い、家庭外での幼児教育を受けている。それらの子供たちに望ましい幼児期の教育・保育を提供し、その育ちと学びを保障するためには、教育・保育の質（構造の質と保育過程の質）を高めるための方策の検討と同時に、その質を捉えるための共通指標の考案が求められる。また、幼小接続期は、国際的にも重要な時期として注目され、就学前教育と学校教育をつなぐ質の高いカリキュラム（移行期の特別プログラム等）が重視されている。

このような状況を踏まえ、本研究は、具体的には次の二つの柱を立て、研究を進めてきた。

- ① 幼小接続期カリキュラム自治体調査の結果分析や実践事例のまとめ、試行調査（質問紙）の実施による幼小接続期の育ち・学びを支える力を捉える手法の検討
- ② 海外の幼児教育の質の評価指標を用いて試行的に評価した結果の分析に基づく幼児期の教育・保育の質を捉えるための評価指標の検討

### (2) 調査研究の概要

本報告書は2部構成となっており、第1部では幼小接続期の育ち・学びに関する研究の成果、第2部では幼児教育の質に関する研究の成果を示している。

第1部の概要：第1章で国内外の幼小接続期に関する研究動向を確認した上で、第2章において幼小接続期のカリキュラムについて、全国的な実態の分析と注目すべき事例（自治体・小学校）の報告を行った。第3章では、幼小接続期の育ち・学びを支える力を捉える手法を検討するために試行的に実施した質問紙調査の分析結果と、それに関わる考察を示した。

第2部の概要：第1章で国内外の幼児教育の質に関する研究動向を確認した上で、第2章では、特に注目されている幼児教育の質の評価指標（評価スケール）であるECERS-3とSSTEWに焦点を当て、その内容を紹介するとともに、日本の幼児教育を対象にそれらの評価スケールで評定を行った結果を示した。第3章では、ECERS-3とSSTEW以外の海外における様々な評価指標を概説した。第4章では、海外における評価指標の内容などを踏まえて日本における幼児教育の質評価スケールを検討した経過等について報告している。評価スケールそのものはより慎重な検討を要すると考えたため示さず、幼児教育の質評価スケールを考案する意義と課題をまとめた。

【研究期間：平成27～28年度、研究代表者：渡邊恵子（幼児教育研究センター長）】

## 2. 研究成果の概要

本報告書は2部構成となっており、第1部では幼小接続期の育ち・学びに関する研究の成果、第2部では幼児教育の質に関する研究の成果を示している。

以下では、第1部及び第2部に含まれる各章各節の概要を示す。

### 第1部 幼小接続期の育ち・学びに関する研究

#### 第1章 先行研究のレビュー

##### 第1節 国内における幼小接続研究の動向

国内の幼小接続研究を検討したところ、以下の特徴や課題が見られた。①最初は「小1プロブレム対策」が中心であったが、次第に「教育の接続」に重点が置かれるようになった。②取組は幼児と児童の個々の交流が中心で組織的ではなく、幼小接続の成果を十分に見いだした研究はまだなかった。③接続期カリキュラムは自治体や園・学校で作成されているが、目的や取組、接続期の捉え方はそれぞれ異なり、カリキュラムに影響していた。しかし幼小が同時に作成することは相互理解を深める可能性があった。④幼児教育実践の中に小学校教育につながる芽生えを見付け、それを強化することで幼児教育の成果を生かして小学校教育につなげる実践も模索されていた。

今後は幼小双方の立場からの検討や、家庭や地域、他施設など子供を取り巻く環境も含めた幼小接続の在り方、更に保育者養成課程段階から接続に対する理解と意識を高める方法など、理論と実践をつなぐ研究が求められる。

##### 第2節 海外における幼小接続研究の動向

幼小接続や幼小連携に関する海外の論文を主に取り上げ、実態、就学レディネス、幼小・家庭・地域との連携、カリキュラム・プログラム等のテーマに沿って整理した。幼小接続の実態や接続プロセス等について取り上げた研究は、主に保育観察、面接調査によって質的に捉えており、幼小接続の実践は、教師や子供に焦点を当てた活動が多かった。幼小接続に影響する要因として、就学レディネスが多く取り上げられている。就学前の社会的スキルがレディネスとして重要であることや適応を支援する準備の必要性等が示される一方、学習に関するレディネスへの関心による学校化への危惧も見られた。また、家庭や小学校、地域との連携、幼小接続に関わるカリキュラムやプログラムが重視されていた。幼小接続に必要な条件として「プロセス」「透明性」「連続性」「関係性」「統合した教育」の5点を挙げ、養成での取組を視野に入れた工夫を提案する研究からは、日本との共通性も読み取れた。

#### 第2章 幼小接続期のカリキュラム

##### 第1節 全国自治体調査の分析

全国で増加する幼小接続期カリキュラムの実態を把握し、適切に構成された接続期カリキュラムの特徴、カリキュラムに求められる視点について分析した。自治体が作成し、文部科学省幼児教育課の求めに応じて任意で提出した幼小接続に関する資料を対象とした。幼小接続期カリキュラムは、平成20-23年度に51自治体、平成24-27年度に96自治体で作成されていた。アプローチカリキュラムは5歳児2学期頃から始まり、スタートカリキュラムは1年生1学期の終わり頃までが多かったほか、幼小を貫く視点として柱立てをした自

治体は約9割に上った。適切に構成されたカリキュラムの特徴は、①「目指す子供の姿」や「育てたい力」が明確で、②柱立てと詳細な下位項目が両カリキュラムに位置付き、③交流連携計画、環境構成や授業の工夫、援助や指導の工夫・配慮、家庭との連携等がカリキュラムに位置付き、④実践事例が柱立てに沿って考察され、幼小のつながりが見える工夫がされていた、という4点であった。

## 第2節 高知市における保幼小連携―「人をつなぐ・組織をつなぐ・教育をつなぐ」

本節は、平成28年2月に実施された自治体事例調査の報告である。高知市は平成24年度以降、子供たちの学びと育ちをつなぐ保幼小連携の取組を、教育委員会及び保育幼稚園課の主導・連携により積極的かつ組織的に行い成果が表れつつある。このような取組は保幼小連携と幼小接続期のカリキュラムづくりを各自自治体が進める際の参考例となりうるということが調査では確認された。ヒアリングから明らかとなった高知市での成功要因には、①関係者の手で指針「人をつなぐ、組織をつなぐ、教育をつなぐ」を定めたこと、②推進地区を選定し実践成果を抽出、パンフレットやカリキュラム事例集の形で市内各園各校に示したこと、③市内の保幼小接続の実態調査結果を基に、各校・園での評価改善に使えるツールを制作配布して自覚を促したこと、④市全体の教育振興プラン・学力向上策の土台部分に保幼小連携を位置付けその有効性をデータでも示し、取組を強化できたこと、などが挙げられよう。

## 第3節 スタートカリキュラムの実践事例

幼児期ならではの「見方・考え方」やそこで総合的に育まれた資質・能力を生かしながら、遊びを中心とした学びを、徐々に教科等の学びに移行することによって、児童が無理なく安心して小学校生活に適応できるようにするスタートカリキュラムの実践例である。

1年生の生活リズムで安心して生活できるようにする環境設定、友達や教職員とのコミュニケーションを深める活動、生活科を中心とした活動や体験を通し、新たな環境への興味・関心を生かして合科的・関連的に学ぶ学習等を報告する。

# 第3章 幼小接続期の育ち・学びを支える力を捉える手法の検討

## 第1節 幼稚園・小学校における試行調査の実施

社会情動的スキルの一つである「育ち・学びを支える力」を検討し、最終的に「粘り強さ」「自己調整」「自己主張」「好奇心」「協同性」の5因子で構成された尺度（案）を作成した。その尺度を用いた質問紙調査を、幼稚園の5歳児の保育者と保護者に実施（2，3月）し、その子供の入学した小学校の1年生の教師と保護者にも実施（7，8月）した。分析では、「育ち・学びを支える力」に関して、評定者（保育者、教師、保護者）による違い、5歳児から1年生への影響、学びや適応、家庭教育環境（読書環境）等との関連を検討した。因子分析の結果、評定者ごとの「育ち・学びを支える力」から「学び・生活の力」への影響、入学前から入学後の「育ち・学びを支える力」への影響については、分析上の限界があった。一方、「好奇心」は多くのモデルで「学び・生活の力」への影響が見られ、縦断モデルでは保育者評定の「好奇心」が、入学後の教師評定の「好奇心」「粘り強さ」「自己主張」へ影響するパスが見られた。また、「育ち・学びを支える力」は読み聞かせや一人読書等の家庭の読書環境、学校への適応、多動傾向と関連する結果が見いだされた。今後「育ち・学びを支える力」に関する尺度を改善してモデルへの適合度を高め、「学び・生活の力」を捉える方法を検討し、長期の「育ち・学びを支える力」の発達的变化を検討したい。

## 第2節 試行調査を受けて一幼・小の取組との関連一

鳴門教育大学附属幼稚園と小学校の連携・接続の取組を合同保育／授業は、「小学校生活への適応を促す接続」という意義を越えた「科学的思考力や学びを接続し発展させる」という願いを込めての取組である。この実践の中では教師同士が変容し、互いの教育の独自性と共通性の理解が促され、授業や保育が深まっていく。資料として、幼小接続期前期・後期の教育課程と指導計画と第1学年の「生活学習」の実践例、評価要素を紹介し、「育ちと学びを支える力」調査との関連について考察した。

## 第3節 調査協力校園における幼小接続の実態と育ち・学びを支える力

質問紙調査への協力校園での幼小接続に関する実態や要望等について整理した。幼小接続期カリキュラムの有無は自治体等の取組によって異なっていたが、接続期カリキュラムは5歳児2学期から1年生5月頃までの計画が多く、交流活動は年に2、3回実施されていた。また、互いへの要望をきっかけに、意味のある連携を行うことや接続期カリキュラムについて共に検討する機会を持つことへの期待を述べた。今後も保育者、教師、行政、教育委員会、養成校教員が協力し、「10の姿」「育ち・学びを支える力」等の下位項目まで意識して理解を深め、新たな視点から幼小接続期カリキュラムに関する検討や研修を行うことで、よりふさわしいカリキュラムや実践が創り出されるだろう。

# 第2部 幼児教育の質に関する研究

## 第1章 先行研究のレビュー

### 第1節 国内における幼児教育の質に関する研究の動向

幼児教育施設の多様化の時代を迎え、日本の保育の質の定義とそれに基づく評価の在り方を検討しなくてはならない。しかし、日本における保育の質の定義は未だ確立されていない。日本の保育は、子供の生活や遊びの質を高めることで子供が自発的総合的に育つことに価値を置き、一方の、将来の市民としての子供に対する効率的な社会的投資に価値を置く文化圏の研究とは性質を異にする。保育の質と子供の発達を測定し、その関連を見る研究はまだ始まったばかりである。診断的評価は余り浸透せず、第三者評価は保育の質や子供の育ちの比較ではなく保育者の意識変化にその意味が見いだされてきた。一定以上の保育の質の保証のためには比較可能な診断的評価が必要とされるが、評価をきっかけとして子供の姿に立ち戻り、その意味を対話的形成的に評価する方策を組み合わせることで、幼児教育施設が主体的に質の向上を目指す仕組みが求められるのではないだろうか。

### 第2節 海外における幼児教育の質に関する研究の動向

海外における先行研究のレビューにおいては、まず、保育の質をめぐる研究動向の背景を踏まえ、2000年以降国際比較研究が変化してきたこと、縦断研究や行政との連携、政策提言型の研究が台頭してきたことについて整理した。先行レビュー研究や2010年以降の研究を検討し、保育の構造の質と関連した研究と保育の過程の質と関連した研究に分けて考察した。前者に関しては環境、保育者、保育期間や時間に着目した研究の発展が顕著であることが分かった。更に家庭教育環境、文化、性差などとの関連での検討といった発展も見られた。後者については、相互作用、子供の仲間関係、教材との関わりなどの研究が進められていることが分かった。レビューを通じて、保育の質に関する海外の研究には、制度改革への志向性や、格差是正の観点からの教育保障への志向性、さらには、構造の解明から実践改革への志向性が伺われた。

## 第2章 ECERS-3とSSTEWの試行調査とその結果

### 第1節 ECERS-3の紹介と実施結果

ECERS-3 (2015, 邦訳『新・保育環境評価スケール①3歳以上』2016) は3歳以上の集団保育の一般的な質を測定する尺度である。空間と家具、養護、言葉と文字、活動、相互関係、保育の構造という6のサブスケールに分類された35の項目につき、各項目に含まれる10前後の指標に基づいて1～7点で評定を行うものである。本調査では国公立私立幼稚園等6園の5歳児クラスでECERS-3を用いて保育の質評価を実施した。その結果、各下位項目の評点は順に4.38, 5.39, 2.87, 2.26, 4.43, 4.81であり、総合点は3.68であった。総合点の幅は2.31～5.39である。個別に項目ごとの状況を見ていくと、「言葉と文字」「活動」の評点が低い理由として、生活や遊びの中で、言葉や数・量・形につながる遊具や教材及び活動、教師の関わりの弱さが見て取れた。ECERS-3による評価は、個別の園ではその数値を手掛かりに質の「底上げ」に活用できる。数値の根拠を話し合うことで保育者間に共通認識が生まれ、具体的な目標を設定できるからである。「環境を通しての教育」を分節的に認識し、段階的に質の向上を行うことが可能になる。尺度の国際性に鑑み、日本の保育を国際比較の俎上に載せることも可能であろう。今回は限られた標本による調査ではあるが、今後の改善の方向性が示された。

### 第2節 SSTEWの紹介と実施結果

本節の目的は、前節のECERS-3に対して、より保育者と子どもたちのやりとりに焦点化して質を捉える尺度“SSTEW”を使用し、日本の園で評定を行い示唆を得ることである。SSTEWの特徴は、「情緒的な安定・安心」に加え「ともに考え、深めつづけること」を鍵概念としている点である。試行の2園では、自立や情緒的安定、コミュニケーションに関する評定結果は比較的高かった一方で、思考や学び、それらの評価に関する評定結果は低いという結果であった。次期幼稚園教育要領改訂も控え、子どもたちが好奇心・探求心を持って遊び、探究を重ねて学んでいくことを、保育者がどのように支えていけるか、また、そうした実践をどのように評価の土壌にあげられるかを検討していく必要があるだろう。日本ならではの保育の特徴、質の高さをどのように捉えるかという点も課題として残っている。

## 第3章 海外の指標等

### 第1節 保育の質評価スケール—SPARK, CLASS—

シンガポールの幼稚園の認証評価SPARKと保育の質評価スケールQRSは、2011年に開発、2014年に改訂した。QRSは①リーダーシップ、②計画作成と管理運営、③教職員のマネージメント、④リソース、⑤カリキュラム、⑥教育学の6基準20項目168指標で、評定は3段階6点満点である。SPARKは、園長が幼児の発達と安心・安定（ウェルビーイング）の促進に向け、指導と学び、管理運営と経営プロセスを改善するための正しい評価と支援を提供する。

クラスルーム評価システムCLASSは、Piantaらが開発し、2008年に発表した。CLASSは、保育者・教師と子供の相互作用を取り上げ、クラスでの教育活動を評価している点が特徴である。①情動的サポート、②クラスの構成、③指導的サポートの3領域10次元42項目から構成され、評定は3段階評価7点満点で、訓練された評価員によって評定される。CLASSの枠組みは現職の専門性発達システムにも適用されており、参考になるだろう。

## 第2節 幼児教育の成果としての学びや発達の評価指標

### ーカリフォルニア州のDRDP(Desired Result Developmental Profile)ー

本節では、成果の質の評価指標として、カリフォルニア州のDRDPを取り上げ、1項では標準化された検査による成果の評価から観察記録をベースにした評価へと変化した背景、2項では改革の主体や財源から見たアメリカの幼児教育、3項ではカリフォルニア州の幼児期の学びや発達のシステムと評価指標の概要、4項では、カリフォルニア州における幼児教育の質向上システムと評価指標であるDRDPから得る日本の幼児教育への示唆について概説した。

## 第3節 アメリカにおける保育者の専門性開発の動向

アメリカの就学前教育の現状と課題を概観し、乳幼児教育重視の政策に転換しつつあり、質の高い保育へのアクセスを子供の権利と位置付け、公的資金が投入されるようになった様子を概説した。一方、養成課程はNAEYCで学士・修士レベルの教員養成課程認定がようやく始まり、公立施設の保育者要件の引き上げに対応しつつあるところである。次に、州ごとの専門性指標の例として、コロラド州の園評価指標と専門性研修指標を報告した。指標作成の経緯と、活用事例、養成教育との連携事例を紹介した。キャリアの段階に応じた専門性指標は研修プログラム認定機関とセットで構想され養成校を組み込んだ取組が特徴的である。

## 第4節 東アジア圏における幼児教育・保育の質向上策

東アジア圏の幼児教育・保育の動向で共通するのは、21世紀に入り、幼児教育・保育への公的投資に力が入り、各国の状況に応じた制度改革を促進するなど、めざましい進展のあったことである。ユネスコ・OECDなどの国際組織が提唱する就学前教育の重要性と公費投入の必要性、その中で保育の質こそが人々の生涯発達や格差克服に重要な影響を及ぼすという議論にも正面からキャッチアップしようと国/市民全体に向けた保育の質向上に取り組んでいることは注目に値する。本節では、日本に隣接する中国・韓国・台湾と、多言語・多文化傾向の強い香港・マカオ・シンガポールに大きく分け、幼児教育・保育の質向上策の有様を、公費投入状況、幼保一元化、カリキュラム、保育者、園評価、その他の特色を中心に概観する。

## 第4章 幼児教育の質評価スケールの考案に向けて

### 第1節 ECERS-3, SSTEWの結果を受けての評価スケールの検討

第2章で取り上げたECERS-3, SSTEWの試行調査の結果を受け、主にSSTEWの項目を取り上げる形で「幼児教育の質評価スケール(案)」の作成を検討したプロセス等について示している。保育評価スケール、幼稚園教育要領等を参考に、項目の文言や評点を検討し、主に評点の見直し、文言の見直し、スケール段階の移動を行い作成した。「幼児教育の質評価スケール(案)」を、2016年9月に協力園で試行的に観察・評定した。スケールに関する結果と課題は、以下の6点である。①評点の見直しにより、実感との差異が小さくなった。②項目の一つである「共に考え、深め続けること」は高度だが、今後意識することが望まれる視点である。③担任1人だけでなく副担任等も考慮する。④高度な項目を3,4歳児で評定できるよう工夫する。⑤「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を検討する。⑥今後信頼性・妥当性を確認する。「幼児教育の質評価スケール(案)」はまだ検討中のため示していないが、試行調査結果を吟味して改善しつつ、今後はスケールを利用した研修手法についても検討することが課題である。

## 第2節 試行結果からの考察と課題

評価指標の試行に評価者として参加した経験から考察を行った。保育者と子供の関わりや、子供の学びを促進する保育プロセスを評価する指標を持つことは、保育の質の担保と向上に一定の効果が期待できる。保育者と評価者双方にとって、研修ツールとしての活用可能性は十分にある。しかし、日本の保育のダイナミズムの中で、目の前で行われている保育者の関わりをどのように評価できるか、慎重な検討が必要である。保育者の連携、発達の時期にふさわしい援助の質、間接的援助や子供たち自身が展開する活動と援助の関係性等、日本の保育の特徴を踏まえた評価指標を検討・作成することは大きな課題である。評価は実践にとって意味あるものとして返っていくべきであり、更なる質の向上へ向けての手掛かりとなることが重要である。幅広い保育行為に含まれる教育的意図について、保育者と評価者が評価指標を起点として共に語り合い、意味を捉え直すプロセスも含めた活用方法を提案することが望まれる。